

日本声楽発声学会

学会通信 42号 2019年（令和元年）9月発行

会長挨拶

『日本声楽発声学会』は、昭和39年（1964年）10月に城多又兵衛先生（初代理事長）と音声生理学がご専門の須永義雄博士の発意に基づき、その後柴田睦陸先生も発起人のお一人に加わり発足いたしました。発足当初は『発声指導法研究会』と銘打ち「衆知を集め、時間をかけて鋭意研究を進める」との設立趣意書を掲げておりました。

その後、昭和46年度の総会に於いて『日本声楽発声学会』と改称され今日に至っております。柴田先生の回想によりますと「当時は音楽界全般に新風を吹き込み、独創的、且つ、活動的な『学会』として、その動向が注目される事となりました。」とあります。そして、又、「会員は九州より北海道まで全国に亘り、総会、研修会、講習会等の各会合に多数の会員が参加され、研鑽を続けて参りました。」ともあります。更に「その間、長野県支部、山口県支部、中国支部が設立され、それぞれの地域に適した研修活動が展開されて来ました。」ともあります。

現在の学会は、歴史上一番長く活動を続けておられる、長野支部（今年の11月で100回目の例会を行う）と、関西支部（現在は余り本部と交流がなく非常に残念に思っている）、それに学会50周年に当たる年に、当時の末芳枝会長と豊田喜代美理事の発議により沖縄支部が発足し、3ヶ所の支部が存在しております。

今、現在は『学会』設立当初の会員の方々がご高齢になられ、この5年から10年位の間に多くの会員が退会されました。中には既に物故者となられた方も少なからずおられるようです。これからの『学会』の課題の大きな目標は、やはり若い世代の大学生や、学校の先生、そして、合唱の指導者や指揮者、ヴォイストレーナーを名乗る方々、更には芸大をはじめとする各音楽大学や、教育大学の先生方に目を向けていただき、当『学会』の会員になっていただくことで、会員数を大幅に増やして行きたいと考えております。そして、共に勉強し、共に研鑽を積んで行くことが、欧米に比して大きく遅れている『声楽発声技術』の向上に繋がって行くものと確信いたしております。

発足以来55年の歳月が過ぎました。『学会』の主目的である声楽家と医学者による共同研究は大きく進んで来て、かつて分からなかった音声生理学上の研究も、この5年～10年間の科学的な進歩により、探索、探求がより一段と前進し、手に取るように、或いは、はっきりと目に見えるようになって参りました。勿論のこと、今の段階では研究の途上であり、ましてや、まだまだ未解明の事も多々あるものと思われまます。全てが解明された暁には、この『学会』の活動も、不要となってしまうのかも知れません。元理事長の米山先生が言っておられたように「50年の計、100年の計」となるかも知れません。唯、私が思うには、今まで『学会』では内々で研究成果を上げて参りました。しかし、私達は大変不幸な時期を過ごし、一時は学会が崩壊してしまうのではないかと思える程苦境に立たされました。ひたすら忍耐に忍耐を重ね、前会長永井先生の、正に捨て身のご努力で、ようやく元の軌道に戻す事が出来ました。そこで、今こそ、その研究成果を外に向かって発信して行く時が来たのではないかと思った次第です。

まず取り組まなければならないのは、発声を指導する方々に『発声のしくみ』をしっかりと認識していただき、その上で、目には見えない部分の複雑な働きを、誰でもが理解可能なように、極めてシンプルな形で捉えていただく事です。そして美しい声、美しい響きを作る為の実践を共に学んで行く事だと考えております。科学的（音声生理学・及び音響学）な理論に基づいて、まず発声の基礎作りを全員の共通理解を持って実践して行けたらと思います。

私が指導を受けたアメリカ人の先生は、いつも、発声は“*It is easy!*”と言っておられました。“*It is simple!*”の意もあると思いますが、成る程、いろいろと自分の中で理解が進むと本当に“*It is easy!*”でしたし、立派に結果を出す事も出来ました。これには、理事の先生方も共通理解が必要となります。まずプロジェクトを立ち上げ、勉強会を開いて、音声学者の立場からと、音響物理学者の立場、そして声楽家の立場から。より深く討議を重ね、共通理解をして参りたいと思います。

私達、声楽家は身体そのものが楽器となるわけですから、スポーツの選手と同じで身体の仕組みと働きを良く知らねばならないと先達の大先生方に教わって参りました。今、スポーツの世界では“Evidence-base”と言う言葉が大変重要であると言われております。余り聞き慣れない言葉ですが、要は「科学的根拠に基づいて基礎作りを実践する」と言うような意味合いではないでしょうか。

そして、もう一つ、“食欲であり続ける事こそが、謙虚な姿勢に繋がる”とも言われます。私が最も大切と思っている言葉です。音楽にしる美術にしる、一般的に芸術と呼ばれる分野の指導は数学(1+1=2)のように答えは一つではないので、指導する先生によっていろいろな方法が編み出されるわけであります。それは、声楽を指導する立場にある先生は自分が習った(受けた)指導法、或いは自分自身の判断で行ってきた指導法の経験に基づいて、それぞれ自分の方法が一番正しいと信じて指導しておられるからだと思うのです。明治の初期に、洋楽を勉強し始めたばかりの教育事情では致し方ない事であったのかも知れません。

しかし、それから150年近くも過ぎた今、そして『発声学会』が設立されて55年も経った今、未だ日本の声楽発声の指導法は依然として欧米に比して大きな遅れを呈していると感じて止まないであります。これからの3年間で学会をどのように発展させて行けば良いのか、日々模索しながら前進して行くつもりであります。

願わくば、私達の日本声楽発声学会の働きによって、日本の声楽界にとっての『令和維新』となりますよう、会員の皆様と一緒に勉強し、一緒に頑張っていく所存であります。

最後になりましたが、会員の皆様からの大いなる叱咤激励を切に望んでおります。よろしくお願いいたします。

会長 川上 勝功

1. 令和元年6月1日をもちまして、理事会は新体制となりました。下記のような布陣で運営に努めて参ります。会長推薦理事に※を付記いたしました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

会長	川上 勝功	声楽家・合唱指揮者・発声研究家・元日本大学芸術学部講師
副会長	佐々木 正利	岩手大学名誉教授・声楽家・指揮者
副会長兼事務局長	豊田 喜代美	声楽家・博士(知識科学)・東京大学講師・元沖縄県立芸術大学教授
理事	池田 京子	信州大学教授・声楽家
	河合 孝夫	河合孝夫音楽研究所所長・声楽家
	小森 輝彦※	東京音楽大学教授・声楽家
	齊藤 祐	鹿児島大学教授・声楽家
	三枝 英人※	東京女子医大八千代医療センター耳鼻咽喉科科長・東京藝術大学音声生理学講師
	菅 英三子※	東京藝術大学教授・声楽家
	鈴木 慎一朗	鳥取大学准教授・博士(学校教育学)
	竹田 数章	仙川耳鼻咽喉科医院院長・桐朋学園音楽大学・洗足学園音楽大学臨床音声学講師
	田中 昌司※	上智大学教授(音楽脳科学)・工学博士
	西浦 美佐子	西浦耳鼻咽喉科院長・沖縄県立芸術大学音声生理学講師
	森井 佳子※	国際関連コーディネーター・声楽家

■『発声指導者のための～発声指導法シンポジウム』参加報告

川上 勝功

私は、今回、合唱指揮者として所属する日本合唱指揮者協会主催『発声指導者のための～発声指導法シンポジウム※』にパネラーとして招かれ、音声生理学専門家で本学会の竹田数章理事、声楽家の望月哲也氏と共に参加しました。(※第20回北とびあ合唱フェスティバル, 2019年6月1日, 北とびあつつじホール, 司会は辻秀幸指揮者協会副理事長。) これまでにも同じ内容のシンポジウムが開催されており、毎回、参加者である合唱指揮者と声楽家の

皆さまの熱心さは格別なものでしたが、今回は特に、当日来られた学校の先生方や合唱指揮者の方々が、『発声指導法』のノウハウについて渴望されておられるのがひしひしと伝わってきました。最後まで熱心に聴講され、次回を希望する沢山の拍手で終了しました。

因みに私は20数年前にも臨床音声学で世界的な耳鼻咽喉科医師の米山文明元会長とタグを組んで同じようなプログラムを神奈川でも数回行った事がありました。今回のシンポジウムのような声楽発声基礎知識を得る勉強の積み重ねが、今の本学会にとっても最も大切であると思っています。研修・研究→発表→反省→研修・研究→発表→の積み重ねの先には、本学会による「声楽発声コーチ認定」への道が見えてくると考えています。まずは、個々の声楽家の持つ体験や口頭伝承による声楽発声についての主観的知識を臨床音声学の基礎知識に基づいた客観的声楽発声の知識として確立し、学会内での声楽発声の共通認識を得ることを目指したいと思います。そのことを魂のレベルで気づかせてくれた今回のシンポジウムであったことをご報告いたします。



右より 辻秀幸・竹田数章・川上勝功・望月哲也の各氏

©TAKE

2. 第110回例会プログラム ※ 内容詳細は冊子及びホームページの「第110回例会」をご覧ください。

A. 研究発表 会場：5-109 大講義室（予定） 10：00 ～ 12：00

- 1) 10：00～10：30 発表者：山田 実 Minoru YAMADA
テーマ：吸気発声の効用
- 2) 10：35～11：05 発表者：林 いのり Inori HAYASHI
テーマ：G. ヴェルディの歌劇における「朗唱」の記譜—歌劇『シモン・ボッカネグラ』（1881）プロローグおよび第1幕フィナーレの研究—
- 3) 11：10～11：40 発表者：豊田 喜代美 Kiyomi TOYODA
テーマ：貴志康一（1909-1937）作曲オーケストラ歌曲作品について

◇ 質疑応答 11：40 ～ 12：00

～～～ 昼 食 ～～～

B. 特別講演 会場：5-109 大講義室（予定） 13：00 ～ 15：00

演題：中世典礼音楽の声楽アンサンブルについて

講師：夏山 美加恵 Mikae NATSUYAMA 古楽声楽家

概要：本講演ではグレゴリオ聖歌や中世の時代の素朴なポリフォニーを歌います。『よく聴く』事を通して、歌詞、旋律、音程の感覚、響き等を身体で感じ取り、呼吸や声にどのような影響が現れるかを体験していただくことを目指します。また当時使用されていた歴史的な記譜法による楽譜を歌うことで時代を超えて当時の人々と同じ視点に立ち、その音楽をさらに実感できると考えております。

C. 現役声楽家の演奏とお話 会場：第1ホール
テーマ：オーダーメイドの作曲家・モーツァルト
講師：臼木 あい Ai USUKI 声楽家（ソプラノ）
ピアノ：森 遥香 Haruka MORI
演奏曲：W.A.モーツァルト作曲

15：20 ～ 16：20

- ・ソプラノ歌手 カタリーナ・カヴァリエーリ嬢へ 《劇場支配人》KV486 より“若いあなた！”
- ・ソプラノ歌手 アロイージア・ランゲ嬢へ 《劇場支配人》KV486 より“別れの時の鐘は鳴り”
- ・カストラート歌手 アダモ・ソルツィ氏へ 《アルバのアスカーニョ》KV111 より“あなたの気高い姿から”
- ・ソプラノ歌手 ナンシー・ストラース嬢へ コンサートアリア “どうしてあなたを忘れられようか
～恐れないうで、愛する人よ” KV505

3. 事務局便り

事務局長 豊田 喜代美

令和元年6月1日付で本学会は新体制となりました。11月例会『研究発表』は、声楽発声、オペラ作品朗唱の記譜、オーケストラ歌曲の各研究発表です。『特別講演』ではオランダ在住の夏山美加恵氏が中世の音楽について聴取者と共に歌いながらお話しくださいます。『現役声楽家の演奏とお話』では先日の新国立劇場オペラ公演で主役を歌われた臼木あい氏（ソプラノ）がモーツァルト作品演奏と共にどのような声と音楽に対して書かれたものなのかをご紹介します。それらの詳細を掲載した冊子『第110回例会』のB5版からA4版への変更が理事会決定され文字も大きくなりました。読みやすくなりましたことを理事一同希望しております。

事務局も新規となりました。引き続きまして、どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本声楽発声学会事務局（担当：佐々木 徹）
〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-14-4
E-mail : info@jars-voice.org Tel・Fax : 03-6804-0626
日本声楽発声学会 Web サイト <http://www.jars-voice.org/>
郵便振替口座 00170-0-119920 加入者名：日本声楽発声学会

日本声楽発声学会
2019年度学会通信
2019年（令和元年）7月30日発行
発行者：日本声楽発声学会
編集者：豊田 喜代美
印刷所：よしみ工産株式会社東京事務所
〒113-0033 東京都文京区本郷 3-26-1 本郷宮田ビル 3F

（ご案内） 臨床音声学研究会

日本声楽発声学会会員の医師関係者が中心に行っている研究会です。どなたでも参加はご自由です。

参加費は1,000円です。参加希望者は氏名と連絡先を記載の上、11月16日までに竹田までお願いします。

○日時：2019年11月23日（土）午後5時から午後7時

○場所：帝国ホテル東京ミーティングルーム ※〒100-8558東京都千代田区内幸町1-1-1 TEL：03-3504-1111

○FAX 03-5313-3281、e-mail: CQN00234@nifty.ne.jp 竹田 数章 仙川耳鼻咽喉科